

好きな映画が道になる



「演劇部の先輩たちはたくさん本を読んでいて刺激的だった」と土肥悦子さん

寒村の危機を救おうと村人たちが奮闘する「殿、利息でござる」などの作品で知られる映画監督の中村義洋さん(46、1989年卒)。難関を突破して入学すると、気が抜けて勉強は放棄。バンドを組んで仲間とふざけて過ごした。

高校3年の春、テレビで放映された映画「マルサの女」に引き込まれた。買ったばかりのビデオデッキで繰り返し作品を再生。伊丹十三監督によるメイキング映像や制作日記で映画作りの裏側に触れると、その道がめざす目標になった。

成城大学文芸学部に進み、自主映画を撮り始める。撮影の細かい工夫が、おもしろくて夢中になっ

た。「逆光で人の顔を撮ると耳に光が透けて真っ赤になるので、粘着テープを耳の裏に貼るんですよ。そんな知恵が大好き」。在学中に撮った作品で映画祭の賞をとり、助監督や脚本家を経て監督になった。

「映画は楽しんで撮らないと良くならない」と力説する。「好きなもの、おもしろいと思うものに自信を持ってほしい。そのためにも、いろんなことに手を出さなきゃ。数学だって、ちゃんどやったら、おもしろかったかもしれないなあ」

映画を撮るのではなく上映する場をつくったのが、石川県金沢市のミニシアター「シネモンド」代表の土肥悦子さんだ。



中村義洋さん。高校時代は歴史が好きで、自転車で地元の古墳巡りをしたことも

高校では演劇部員だったが、部室より映画館に通った。大好きなジェームズ・ディーン作品が2本立ての時は、「ジミーが動いてる！」と感激して終日館内にいた。勉強する周囲の級友たちを横目に、映画や本を楽しみ、恋もして、高校生活を遊びぎった。

一浪で筑波大学比較文学類に進んだ。映画サークルに入ったが、1本撮って「才能がない」とあきらめた。映画にかかわりたいけれども何をすればいいのか、気ばかり焦った。

答え探しに、卒業後はフランス・パリ第三大学映画学科に留学。2年半、映画漬けになった後、映画配給会社ユーロスペースに就職した。映画の買い付けや宣伝の仕事が楽しく、「月曜日が待ち遠しい」ほどだった。

だが、結婚を機に仕事を離れて金沢に。ミニシアターが無く、見たい映画が見られない状況に耐えられず、自分でつくってしまっただ。

高3の時、将来について「映画の勉強のために留学して、最終的には自分の映画館を持って、おばあちゃんになったらもぎりをする」と書いていた。好きなことに夢中になっていたらその通りになってきた。